
はた迷惑ネバーランド

佐倉アヤキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はた迷惑ネバーランド

【Nコード】

N4295R

【作者名】

佐倉アヤキ

【あらすじ】

小さいことがコンプレックスな女の子・小芝さよは、ある晩突然「ピーター・パン」と名乗る不思議な瞳の美少年に刺された挙句、ネバーランドに強制連行される。おまけにピーターからはさよが「ウェンディ」だと勘違いされていて、果てには「ウェンディは僕のお嫁さんになるんだよ」だなんて囁かれ…さよの波乱万丈な恋がはじまる。

物語後半の筋書きが「ピーター・パンとウェンディ」に沿うため、二次創作指定にさせていただいておりますが、前半は完全なオリジナル

ナル
です

登場人物紹介（前書き）

現在 a c t . 4 までに登場するキャラを紹介しております。ネタバレが気になるという方はお気をつけください。

登場人物紹介

【メインキャラ】

小芝さよ…17歳の女子高生。身長150センチ。童顔。ピーターに刺されて、無理矢理ネバーランドに連れ去られる。

ピーター：自称ピーター・パン。お砂糖菓子みたいに甘い少年。なぜかさよがウエンディだと勘違いしている。

ティンカー・ベル：通称ティンク。金物修理の妖精。グラマラスな美女。姉御肌。

【迷子たち】

トートルズ…迷子たちの中で一番のドジっ子。さよの苦勞性に少なからず同情している。

ニブス…愛想のいい少年。

スライトリ…若干ナルシスト。

カーリー…やんちゃ坊主。よく靴下に穴を開ける。

ふたご…神秘の生き物。

【海賊】

ジエームズ・フック…年上好みにはたまらない切れ者の美形。紳士的だがピーターには怯える。

スカイライツ…名前だけ登場。原作で作者の都合に合わせて登場数ページ後に殺されたかわいそうな人。是非今後贖罪してやりたい人。

a c t . 1 呪いに落ちたセレナーデ（前書き）

ヒロインの意見は偏見にまみれております。時々そうした表現が見られますが、あくまでヒロインの意見として創作しており、作者自身に他意はありませんので、予めご了承ください。

act・1 呪いに落ちたセレナーデ

小芝さよは呪われていた。

少なくともさよ自身はそう思っていた。さかのぼること17年前、我が愛しの両親が、さよの名前をつけた時から、とかくさよは「小さいもの」に呪われているらしかった。

原因の八割くらいは、年中頭の中にお花畑でも咲き誇っていそうなお茶目で能天気でちょっぴりドジな母親だ。彼女は小雪ちらつく初春のある日、どこかのコンサートかなにかで聴いたセレナーデにひどく感銘を受け、以来自分に娘ができたなら「小夜」と名づけるのだと固く誓った。男の子だったら「しょうや」と読ませるのもすてきね、とか思っていたらしい。母はオーケストラを聴くのが趣味らしく、未だに我が家には、さよにとって運命となる例のセレナーデが収録されたレコードが、神様とばかりに祭られている。さよは小学生時代に家に招いた友人が、豪華な額縁に入ってこれ見よがしに飾られたレコード盤に一瞬ドン引きしたのを目撃して以来、もう二度とリビングに人を通すまいと心に決めた。

大体、そうまでして娘にこの名をつけたいのなら、「小芝さん」と結婚したところからどうなのだと問いたい。母は強固に、生まれた娘の名を「小芝小夜」にするのだと主張したが、さすがに見かねた父が「確かにバランスもいいですけどね、字面的にどうでしょうね」と助け舟を出し、母は泣く泣く下の名前をひらがなにすることで妥協したのである。こうして、晴れてさよの名前は決まった。

しかし、誰でも一度はぶち当たる悩みに遭遇したのは小学校三年生のとき。さよはその頃には既に「小」の字に呪いをかけられていたらしく、背の順に並べばいつも一番前、前にならえばいつも腰に手を当てる役、要するにクラスいちばんのチビっ子だった。ついた

あだ名は「チビ代」。得てして融通の利かないクラスの男子諸君は、いくらさよが「私の」よ」の字はそれではないのだ」と抗議しても聞き入れちゃくれなかった。語弊があつたらいけないので弁解しておくが、さよは別段いじめを受けていたわけではなく、むしろそのすばしこい動きから、まるで当時流行ったハムスターかなにかのようにクラス中、果ては教師連中にまで愛でられていた。しかしその不名誉なあだ名にさよは心底傷ついた。

そしてさよは幼心に悟つたのだ、「小さいものは敵だ」と。

17歳になつたさよは身長150センチ。まあ150センチを超えたのはいい。学年ではさよよりも小柄な子は何人かいる。しかしさよは童顔で、未だに小人料金で切符が買えるだろう。どんなに化粧に凝つて、髪の毛を染めて、ちよつと巻いてみたりなんかして、フェミニンな私服に身を包んでみたつて、この身長と童顔のせいで彼氏のひとつもできやしない。先学期男子の噂話を小耳に挟んでしまったところによると、別にかわいくないというほどでもないが、小柄な見てくれとは裏腹な背伸びしたおしゃれに、なにやら背徳の香りを感じるらしい。さよの努力は完全に裏目に出ていた。

そんなわけで、さよはこんな名前に生まれたばかりに、小さいことに悩みが尽きない。そのくせある意味同族であるはずの小犬には吠えられ、小鳥には糞を落とされ、それを見た子供には笑われる。冗談ではない。これは確実に、呪われているのだ。

目下の悩みは彼氏だ。友人に続々とお相手が決まる中で、さよだけはそんな雰囲気の男性と巡り合えない。彼氏にするなら絶対小柄なひと。こればかりは大柄ではいけない。ヤツラはすぐに人を子ども扱いするし、見ているだけで首が攣る。やはり小さいことにコンプレックスを持つことで分かり合いたい。ゆくゆくは学年で「かわいいカップル」だなんて噂されるのも悪い気はしない。顔がかつ

こよくて優しければ言うことはない。しかし残念ながらさよのクラスには、高身長のもさくるしい男ばかりが揃っていた。

だからこれは夢だ。ぬくぬくと布団にくるまったままさよは硬直した。夜の帳がおりた頃、なぜか開いた窓とカーテンからうつくしい夜空が見える。これまで見たこともないほど大きくて赤い月の光を受けて、その少年は佇んでいた。そして、ゆうらりと優しい手つきでさよの肩あたりを揺らして、ぬるま湯みたいな温い声音で、「ウェンディ。ウェンディ、起きて」とささやいたのだった。

お砂糖菓子みたいに甘い顔立ちだ。

さらりときめ細やかな白い肌に、鼻筋が通って、桜みたいな色をしたくちびるはともやわらかそう。薄茶の細い髪の間隙から、うつすら赤く染まった耳がのぞいている。特に印象的なのは大きな瞳。くりりと丸い目の色は、青やら紫やら水色やら、うつすら緑がかつてもいるだろうか。幻想的な空の色だ。きれいなグラスにソーダ水を注いだみたいに、奥のほうできらきら光っている。さよは目を瞬いた。さよの好みと真ん中の美少年だった。

さよが目を覚ましたからか、少年は薄らとわらった。彼、チークでも塗ってるのかしら、さよはぼんやりと思った。少し赤らんだ頬はまるで人形のように。たいそう幸福そうな微笑みを浮かべた少年は、首をかしげてまたささやいた。

「ウェンディ、やっと会えたね」

「……んん？」

飛び出した怪訝な声は、起き抜けで普段より半オクターブ上がっていた。かすれた声にぎよつと口をつぐむと、彼はくすりと笑って、横になったままのさよの後頭部を撫ぜた。丁寧な手つきだった。

「寝起きのウェンディ。かわいいな」

「……」

いや。いやいや。次第に覚醒していく意識に比例して頭が混乱する。この少年は誰だ。どうして窓が開いているんだ。まずウェンディっ

て誰だ。

さよは飛び起きた。ベッドの脇に立っていた少年は、ばすんと勢いをつけてベッドの端に座った。すらりとした細い脚が伸びる。さよはうらやましいくらい的美脚に食い入るように見入った。

よく見ればこの少年、随分とファンシーな服装をしている。丈の長いシャツは、腰の辺りで緩やかに太いベルトで締められ、そのベルトから、ゲームにでも出てきそうな、皮の鞘に入れられたダガーがぶら下がっている。下は厚めの生地のカユロット。膝丈のロングブーツは、黒くてごついデザイン。さよと同じくらいの年に見えるが、彼はいわゆるコスプレイヤーというやつだろうか。どうせなら王子様の衣装でも着たらいいのに。間違いなく似合うだろう。口惜しい気持ちでさよはその口を開いた。

「アンタ、誰」

「ピーター」

まぎれもなく横文字だ。それにしても達者な日本語。在留外国人？それともハーフだろうか。なんにせよここは夢の世界なんだから、深いことは気にしても仕方あるまい。さよは眉根を寄せた。

「私、ウェンディじゃないし」

この純日本人がそんな西洋のお嬢様みたいな名前のはずもなく、これまでになさよがつけられたあだ名といえれば例の「チビ代」くらいのものだ。大体、「小芝さよ」と「ウェンディ」。いくら夢といえども掠ってすらない。もうちょっとましなネーミングセンスはないのか、深層心理の私。そこまで考えてはたと気がついた。ピーターとウェンディ？

「……いやいや、そんな、なんでいきなりピーター・パンなの」

さよはピーター・パンシンドロームでもない、どちらかといえばさつさと大人になりたい。まかり間違ってもピーター・パンとは相容れない性格のはずだ。

自称ピーター・パンはくすくすと春風のようにやさしく笑って、さよの頭に再び手を伸ばしてきた。冷たい指先が頬を掠めて、耳の裏側をするりと撫でる。もう一方の手はさよの腕をするするのぼって、肩裏へと回される。ゆるやかに抱きしめられる形となったさよはガチリと固まった。

綺麗な瞳の少年はこつりと額をあわせてきた。端正な顔立ちが視界いっぱい広がる。ちよつと待って、私ってひよつとしなくても今寝起きなわけで、夢の中の怪しいひとと言えども、超をいくつつけても足りないくらいの美少年すっぴんの顔を見つめられている次第で…

「え、えええ、ちよつ、勘弁して」

「くす。ウエンディだいすき」

ピーター・パンの首がちよつぴり傾いた。うつとりと目が伏せられる。怪しい雰囲気。私ってば、彼氏ほしいとは言ったけど、そんなに欲求不満だったの！？真つ白な脳はどこにどうシナプスをつなげたのか、さよは両手を顔面にかざして、素早くピーター・パンの顔を押して、叫んだ。

「ひっ、人違いです！」

「……」

ぱちりと彼の瞳が開いたのが指の隙間から見える。ぼんやりとした目がさよを映す。さよは怯んだ。彼は自分の顔を覆っている指を見下ろした。手のひらでふさがれた彼のくちびるが、ふるりと震えた。

「ひいっ」

さよは手を離して思わず布団にこすりつけた。な、舐められた！舐められた！

「なにすんの！」

「だって、ウエンディが僕のこと拒むから」

甘やかにピーター・パンは言った。そもそもピーター・パンってこんなにフェロモン撒き散らす少年だっただろうか？まず、ピーター・

パンの服装といえばもつとエルフみたいなやつじゃなかったっけ？
彼の服装はやや路線が違っていた。

「だから私ウエンディじゃないから！小芝さよだから！」

自分からこの名を肯定的なたちで言うことがあるうとは。やはり小さいものは敵だ。小柄な男性に夢を見ていた私がいけなかったんだ。さよは涙を飲んだ。この似非ピーター・パンは、さよの必死の抵抗もささやかなものであるかのように笑っている。頬にくちびるをすべらせている。ええい、このセクハラ・ピーター・パンめ！

「ウエンディは、ウエンディだよ」

ピーター・パンは全く聞き分けがなかった。

「僕のかわいい、大好きなウエンディ。これからずっと一緒だよ？ いったいかわいがってあげる」

「う、うわあああ」

心底引いた。彼はエロスの申し子か。ピーター・パンって子供だろう。なんで子供がこんなにオトナな小説から引っこ抜いてきたみたいな台詞を吐くのだ。夢だからか。

「や、や、やだ、やだやだっ、お願いホントにやめてったら」

「ムリ」

とうとうぺろりと下唇を舐められた。さよはガタガタ震えた。いかにこの少年が美しくても、さよの好みぴったりだとしても、これが夢でも、いきなり見ず知らずの男に迫られて役得ラッキーと思えるほどさよはさばけた性格ではなかった。夢ならはやく覚めてくれ。願う間もなく呼吸ごと包み込まれた。

食べられる！さよは悲鳴でも上げてやりたかったが、恐怖からか息苦しさからか、のどの奥がつかえて口々に声もあげられやしない。ピーター・パンはついと上目遣いに、美しすぎて気味が悪いその瞳を開いて、さよの一挙一動に目を凝らしている。するりと何かが抜ける音がしたと思ったら、冷たくて硬いものがさよの背中を這っていった。なんだろう？ 金属のような感触だ。それはさよの左の

肩甲骨あたりで止まった。ふと感触が消えたと思ったら、つんと尖ったものがあたる。そういえば私、Ｔシャツに中学時代の学ジャー姿じゃないか、そんな場違いなことを思い当たったところで、うつと声が詰まった。なにかを当てられたところから、ぐつとそれを押し込まれた。熱すぎるくちづけは続いたまま。ごぼごぼと喉の奥から何かがこみあげてきたと思えば、口いっぱいに苦くてちよつと辛い、そのくせどこかまるやかな味が広がる。液体？血だと気づいたのは、親知らずを抜いたあとの味と少しだけ似ていたからだ。

どうしてこんなに息苦しいのだろう。ピーター・パンはリップ音を立てて唇を離れたのに。彼の桜色の唇のまわりは真っ赤になっていた。紅玉のりんごみたいに染まった舌がぬるりと口の周りをぬぐう。視界がかすんだ。

「あれ、甘くないや。もつと蜜みたいな味かと思ってた」

ピーター・パンは味わうように口の中で転がしてつぶやいた。その姿さえぼんやりと滲んでいく。眠りに落ちる感覚に似ていた。どういうこと？聞こうと思ったのに、あふれたのは言葉ではなく赤い液体ばかりだった。

ヒュウヒュウ、窓を細く開けた時の、風の音のような息がなんども繰り返される中、しっかりと抱かれた腕だけが確かな感触だった。息が弱まるのを不思議に思いながら、ああ、私ってば死ぬのかな。考えたところで、さよは暗闇に落ちた。

a c t . 1 呪いに落ちたセレナーデ（後書き）

まずは全国の小芝小夜さんごめんなさい。とにかくいろんなことが小さいヒロインが書いてみたくてはじめてみました。今回のヒーローもやっぱり強引フリーダム設定です。

a c t . 2 ようこそここはネバーランド（前書き）

イヤなシーンを仄めかす表現あり。直接的な描写は一切ありませんが苦手な方はお気をつけください。

act・2 ようこそここはネバーランド

硬いベッドの感触に、さよはううんと寝返りを打った。うちのベツドってこんなに寝苦しかったっけ？しかも随分と狭く感じる。さよは布団を引つ張り上げようとしてみたりを探った。薄い布が指にかかって、そらきたと身に寄せようとしたが、なにかに引っかかってうまくいかない。怪訝に思っ て目を開いた。

視界いっぱいには件の美少年が広がって、さよはうんざりした。これは夢の続きか。そこまでして私の深層心理はこの美少年を望んでいたのかしら、私ってそんなに面食いつてわけじゃないとおもうんだけど。あどけない寝顔を眺めていると、少年のまつげがマスカラでも使ってるんじゃないかと疑いたくなるくらいに長いことに気がついた。

自称ピーター・パンの吐息がさよの鼻先にかかって、ようやくとさよは我に返った。

「…えええ、ないない、これないって」
自分の記憶が正しければ、“前の夢”でさよはこの少年に刺されたはずだ。しかもすっごいキスをかまされながら。私って実はけっこう危ない奴なのかもしれない。ぞつとしながらさよは少年をぐいと押しのけて起き上がった。

ここはどこだろう？窓一つない部屋だった。あちこちに木の葉や木の実が転がっていて、なんだか汚らしく散らかっている。壁は木造。熊かなにかの毛皮が、絨毯代わりだろうか、床に敷かれている。明らかにさよの部屋ではない。まさか、このピーター・パンに連れ込まれた？考えたくない。さよは頭を抱えた。

「ウエンディ？」

声をかけられて、さよは「ああ、その設定はまだ適用中なのね」と

げんなりして振り返った。

空色の瞳をこすりながら、眠たげな自称ピーター・パンは夢見心地にさよを見ていた。さよは冷たく言い放った。

「私、ウェンディじゃないって。さよだって」

「ん？」ピーター・パンは唇を尖らせた。「ウェンディはウェンディだよ」

さよは溜息をついた。

「ここ、どこ？」

「僕んち」

ほらやつぱり。さよはうなだれた。どうして夢の中でこんなに疲れないかならないのか。

「夢ならはやく覚めて……」

「夢？」

ピーター・パンはにつこり笑った。寝起きとは思えないさわやかな顔。寝癖ひとつ見当たらない。おいおい、セオリーでいけば美少年は低血圧であるべきだろう、偏見に満ちた考えでさよが内心突っ込んだその時、ピーター・パンは甘くささやいた。どうやらこの口調はデフォルトラしい。

「夢じゃないよ」

「うん？」

「夢のはずないよ。だってほら、僕もきみもちやあんとここにいるだろ？」

そう言つてピーター・パンはさよの手をぎゅっと握った。さよは案外大きな彼の手を見つめながらつぶやいた。

「現実だったら恐ろしいけど」

本気で言つたのに、ピーター・パンは取り合わなかった。からから笑い声を上げてベッドから立ち上がると、恭しくさよの手を取った。さよは昔読んだ童話を思い出す。でもさ、ピーター・パンって、確か自惚れ屋で物忘れが激しくて、おまけに物知らずの男の子じゃなかったっけ。そういえばウェンディにキスを迫られても通じてい

ない場面があつたはずだ。さよは結論づける。このエロスの申し子が、ピーター・パンのはずがない。とはいえこれは夢だから、多少の脚色はやむなしとも考えられるが…

「ぎゃっ！ いったーい！ 何すんの！」

「だってウエンディが変なことを言うから」

思い切り髪の毛を引っ張った少年はこともなげに言った。この物知らずは、髪は女性の命だということも知らないのか！ キッと睨んでやると、それとは正反対に、ピーター・パンはなだめるようにさよの髪を撫ぜながら、さよの頬に唇を寄せた。

「痛いでしょ？ だからこれは夢じゃないよ」

「……え」

いや。いやいや。まさかそんな馬鹿な。思わず自分で手の甲をつねつてみたが、痛い。確かに痛い。夢じゃない？ まさか。本当は痛みなんて感じてなくせに、夢の中では「痛い」ということになっているんだ。そう。だからこんなのは痛みじゃないの。…嘘だ。涙が出るほど痛かった。

「え、ええ、えええええ、嘘でしょ冗談でしょ勘弁してよ。現実とか何ソレありえないんだけど」

「ウエンディ、かわいいね」

「だから私ウエンディじゃないってば！ え、ちよっと待って、現実だとしたらマジでここのなの。ネバーランドとか笑えない話はやめてよ」

「ネバーランドだよ？」

脱力した。ああ、神様仏様。今まであなた方を信じてこなかった無礼をお許してください。これからは敬虔な信徒になりますだからお願い誰でもいいから助けて！

「…ん？ ちよっと待ってよ。私アンタに刺されたような気がするんだけど」

「刺したよ？ ウエンディの血、ちよっと鉄臭かったけどおいしかった」

た」

「そんな批評はいらん！なに、まさかここ天国？それともやつぱ夢？ていうかなんで刺したの！？ああもうどこから突っ込んだらいいものやら！」

「だってここはネバーランドだもの」

うつとりとピーター・パンは言った。さよは怪訝に眉をひそめる。

彼はベッド脇に脱ぎ散らかした靴を履きながら言った。

「ここはウエンディのネバーランドだから、僕がきみとずっと一緒にいるためには、ウエンディのこころを僕だけのものにしなくちゃいけなかったんだ」

「はあ？」

そもそも彼の言っている「ウエンディ」とは誰のことを言っているのだろうか。わけがわからないが、とりあえずここが夢か現実かは置いておいて、さよが自分の家ではなく、彼曰くネバーランドにいることに納得しなければ、話が一向に進まない。さよはひとつ深呼吸すると、開き直ってピーターに向けて身を乗り出した。

「まあ、…うん、とにかく。アンタはピーター・パンで、ここはネバーランド。私はアンタにここに連れてこられた。これで合ってる？」

「うん」

ピーターは素直に頷いた。ならば話は簡単だ。ここが夢だとしたら（どう考えても夢のはずなのだが）、とにかく目覚めるのを待つしかさよにはできない。ピーターの性格にしろ、随分さよの知る物語とは内容が改変されているようだが、とにかくこれはピーター・パン。童話の世界に迷い込んだとも思えばいい。ピーター・パンの筋書きは、昔読んだ童話やらアニメやらで大体知っている。まったくわけの分らない世界というわけでもないのだ。さよは、素直にウエンディの職務をまっとうすればいいのだろう。夢とはそういうものだ。

「ということは、私はなんのためにここに連れてこられたの？迷子

たちの母親役になれっていうの」

「うっん？」

不思議そうにピーターは首を横に振った。おやと目を睨ると、彼は頬を赤らめながら、さよを抱き寄せた。嫌な予感がする。耳元で色気たっぷりの声で囁かれて、さよはくらくらした。

「ウエンディは僕のお嫁さんになるんだよ」

「……」

前途多難。目の前の永遠の少年は、ジェンダーに関してはしっかりとトナラしかった。

さよは悟った。とにかく、だ。もうひとつの可能性、万が一ここが夢でなかったとしたら、この色気たっぷりの絶世の美少年の勘違いをさつさと解いて、さよは愛しの我が家へ帰らねばならない。結局さよは刺された理由も、その割に傷跡も痛みもないことについて解明できなかったが、ひとまず今は無事ならそれでいい。どうせピーターに聞いたところでややこしくなるだけだ。

（……うっ、お父さんお母さん、私は子供の国であろうことが大人の階段を上ってしまったようです……）

ぐったりしながらうめいていると、ピーターがなにやらベッドの下をごそごそ探っていた。見ると、彼が引きずり出してきたのは、紫のシックなワンピースだった。要所要所に、黒のお洒落なレースが縁取られていて、肩がパフスリーブになっている。現代っ子が街中で着たらこのご時世、確実に浮くであろう。

もしかなくともピーターはそれをさよに与える魂胆らしい。彼は手みずからドレスのボタンを外して、さよに着せ替え人形よろしく着付けていく。バストの部分が若干緩いのを恨めしく思いながらさよはピーターを見上げた。随分と慣れた手つきだが、このピーター・パンは一体どこで女の着替えなんてスキルを身につけたのだろ

う。彼は空色の瞳を凝らしながら丁寧に、襟に通された黒い総レースのリボンを結び終わると、自ら着飾った意気消沈状態の嫁（仮）の腰を引き寄せた。甲斐甲斐しく手櫛で髪を整えてくれる美少年の手つきにぼんやりしつつ、さよは掠れた声でつぶやいた。

「この服、だれの」

「ん？わかんない。前に海賊船から持ってきたやつ」

さよはいっそ気を失えたら楽なのに、と思った。やはり流石はネバランド、そりゃあ海賊船がなきゃ始まらないよね。内心でぼやきつつ、ならいいやと声に出した。おそらく合意の上で持ってきたわけでもなかるうが、いずこかの店頭から盗んできたと言われるよりはまだマシだ。どうせ海賊だってこのドレスを金を出して買ったわけでもあるまい。さよの海賊観はかなり偏っていた。

ピーターはさよの髪を梳きながら言った。「髪飾りがほしいね。取りに行こう」

「えっ、ちょっと待ってよどつという意味？」

さよは顔を上げて抗議した。

「どこに行くっていうの。私やだよもうくたくた、ここから一步も動けないって」

「だめだよ、奥さんと旦那さんは片時も離れてちゃいけないんだ」この男の価値観は一体どこからやってくるのだろうか？さよは目を白黒させたまま身を起こされて、しっかりとした編み上げのロングブーツを脚に通された。この少年がほしいのは、果たして嫁なのか人形なのか。悩みどころだ。

ピーターに引きずられるようにして歩き始めた時だ。扉をドンドンと叩く音が響く。扉越しに、鈴の鳴るような声が聞こえてきた。

「ピーター？ちよつとオ、ピーターったら！開けなさいよオ！」鈴が鳴るような可愛らしい声音だった。ピーターが小さく舌打ちをする。甘ったるいばかりのこの少年の不機嫌そうな顔。そのくせ相

変わらず麗しいのだから神様は不公平である。彼は先ほどの行動力はどこへやら、心底気だるそうに扉を開けた。すると、とたんににか小さなものがぐんと飛んできて、さよの目の前に金色の粉が舞った。

妖精だ！さよは息を呑んだ。金色の粉を撒き散らしながら、その小さな生き物は目にも留まらぬスピードで部屋中を駆け巡り、ピーターの鼻先に迫って止まった。

見るも美しい姿だった。金色の光に包まれながら、白い衣装に身を包んでいる。彼女はひらりと羽を揺らして、恨めしそうにピーターに言った。

「一晩もあたしとあのガキ共をいっしょに木の上なんか押し込めて！」

「別にいいだろ、妖精つてもともと木の上で寝るモンなんだから」

「おあいにくさま！ヤツラのいびきがうるさくて、一睡もできなかったわ」

そうして美しい妖精は、立ち呆けているさよに視線を向けた。ふんわりと滑るようにさよの目の前まで飛んでくると、ちよつと釣り目気味の瞳でさよを見下す。白いすらりとしたマーメイドラインのドレスに包まれた身体は、同性のさよが見ても惚れ惚れするほど妖艶だ。この胸何カップかしら、そんな下品なことを考えていると、妖精は怒り心頭で豊かな金髪を振り乱した。

「それで？」妖精の口調は馬鹿丁寧だった。「お嬢ちゃん。アンタがピーターをかどわかしたとかいうウエンディっておばかさんかしら」

「そうだよ」

「違います」

ピーターにやや先を越されたが、さよは断固として言った。妖精が眉をひそめる。このセクシーな女性ならば話が通じそうだ。想像以上に色気に満ち満ちた妖精だが、この場合大人であればあるほど好都合。彼女にピーターを説得してもらえば話が早い。さよは祈る

ような心地で訴えた。

「私、そのピーター・パンとかいうひとに、ウエンディだと勘違いされて連れてこられたんです。人違いなの！」

「ひとちがいイ？」

妖精は素っ頓狂な声を上げると、半眼でピーターを見た。しかし、当の彼はきよんとしている。まったくもって話の通じる余地もなさそうだ。妖精は溜息をついた。

「ま、確かに、アンタ”ウエンディ”って顔じゃないわねえ。ブリタニア人ってかんじでもないし」

「でしょ!？」

さよはようやくほっと息をついた。

「なのにあの人、ぜんぜん聞いてくれなくて」

「だってピーターだもの。人の言うことなんて聞きやしないわ」

妖精はひとつ肩をすくめた。そこでようやく、なにやら自分が馬鹿にされているらしいと悟つたらしい。ピーターはムツと顔をしかめて、大股でこちらにやってくるなり、妖精を手の甲で払いのけてさよの首に抱きついた。濡れた瞳で首を絶妙の角度に傾けると、さよの額を自分のそれで撫ぜた。

「いったーい!このガキ、何すんのよ!」妖精がわめいた。

「ティンクなんかと話してないで、僕だけ見ててよ、ウエンディ」

「ウエンディじゃなくてさよだって」

さよはこの問答は何回目だろうかとうんざりしながら言った。

「あなたがティンク？」

「そーよ。ティンカー・ベル。好きに呼べばいいわ。ピーターがお嫁さんを連れてくるなんて言うモンだから、どういじめてやろうかと思ってたけど、案外アンタとは仲良くなれそう。特別に妹分くらいにならしてあげる。壊れた金物があつたら、あたしのところに持つてきなさい」

ティンカー・ベルは胸を張った。ならば姉貴分としてこの男をどうにかしてくれまいかと頼もうとしたところで、痺れを切らしたピ

「ターがみるみる無表情になった。がしりとさよの肩をひざ裏に腕を回して、すくい上げられる。さよはぎゃあと悲鳴を上げた。おお、これが噂の「お姫様だっこ」か、考える時間すら与えられずに、さよは気づけば空上の人となっていた。

「ヒッ！と、とと、飛んでる！」

さよが怯えて自分からピーターの首にしがみついたので、ピーターはすっかり有頂天になった。いつの間に家を飛び出したのか、大きな綿雲の一角に腰掛けて彼は甘い声で言った。

「どこに行きたい？どこにでも連れて行ってあげる。さんご礁のある人魚の湖？ほら穴？インディアンのキャンプに行こうか。それとも、海賊のキャプテンを殺しに行くのもいいね」

さよは最後の台詞は聞かなかったことにした。

act・2 ようこそここはネバーランド（後書き）

基本的にこの世界ではピーターの都合のいいように物事が進んでいきます。ので、どう考えても展開おかしいだろという点もあって「ピーターだから」という理由で書いてる部分がいくつかあります。深く考えずにお楽しみください。

act・3 さよ、絶体絶命

ひと月もする頃には、さよはすっかりこのネバーランドに馴染んでいた。迷子たちはやんちゃで個性豊かなものだから、元々子供があまり好きではない（だって連中は私よりも年下のくせして、私のことチビって呼ぶんだもの！）さよは最初こそ避けて通ったものだが、彼らはピーターの命令にそこまでしなくとも思うくらいに絶対服従だし、よくさよの手伝いをしてくれる。根はいい子たちなのだ。入用なものはティンカー・ベルが他の妖精に頼んで調達してくれるから、生活に不便することもなかったし、勉強にも人間関係にも悩まされることの無いこの暮らしは、長い休暇にバカンスにでも出たみたいに快適だった。

ただし、元凶のピーター・パンにだけは、さよは未だに慣れることができずにいた。どいつもこいつも、狩りの獲物から食事の時間まで、このピーターに定められているというのだからただけない。このネバーランドという場所では、敵味方関係なく誰もがピーターの手の内にあるようだった。要するに、彼がさよを腕の中に囲って、「この子が僕のお嫁さんだ」と言った時点で、さよはもはや檻の中、というわけだ。

「ま、あきらめなよ。さよねーちゃん」

人違いされた哀れなさよに向けて、迷子たちの中でもっともドジなトートルズは心底同情するように言った。

「しょーがないよ。ピーターがそうだと言ったら、絶対にそうならちやうんだから」

さよはうんざりした。大体、彼のあの美しさがいけないのだ。あどけない精巧な甘い顔立ちで、あの夢みたいな色が詰まった不思議な瞳に見つめられたら、さよごときに太刀打ちできるはずもなかった。犬と見紛う人懐っこさで擦り寄って、そうかと思えば猫のよう

な怪しさで流し目を送られたら、この17年間さしたる恋愛スキルも磨いてこなかったさよに対抗する術などない。さよはここ最近、すっかりピーターに絆されていた。

「でもさ、おかしいよね」

いつだったかさよはティンカー・ベルにこう言った。

「私たちって別に好き合ってるわけじゃないのに。ピーターもどうして、私みたいなちんちくりんに初対面の時からベタベタできんのかなア」

「さよってば、自分で言ってる悲しくないわけ」

ティンカー・ベルは美しい声で呆れたように言った。

「さあね。そういうモンなんじゃない？少なくとも、あたしがさよの立場なら、ピーターほどの男に言い寄られて悪い気はしないわね」
「そりゃあ、顔だけは一級品だけどさ」

ピーターの行動には始終驚かされっぱなしだ。突然思い立ったようにさよを部屋に引きずり込んだり、かと思えばさよなど放っぱってどこかに飛んでいったきり何日も帰ってこなかったり。はたまた、その身体を返り血まみれにして帰ってきた時には、流石にさよも悲鳴を上げた。

ピーターにどこかカリスマ性があるのは認める。いつだって彼はキラキラ輝いているし、こんな出会いでもなければ、さよも彼に恋することがあったかもしれない。しかし一足も二足も飛び越えて彼の嫁になったさよとしては、いつだって内心は複雑なのだ。彼は憎めないし格好いいけれど、さよはいつだって彼に振り回されっぱなしだ。しかも、その矛先は「さよ」じゃなくて、「ウェンディ」なのだ。

さよは口癖のように、彼が「ウェンディ」と呼ぶたびに修正していたが、そんなとき決まって彼は、「どうして1たす1は2なの？」と聞かれたかのような不可解そうな顔をする。彼にとって、自分が連れてきた少女が「ウェンディ」であるのは当然らしかった。ピー

ターが大事に独占しているのが、実は「さよ」だなんて予想だにしていけない。

せめて彼が私を「さよ」って呼んでくれていたなら、まだ反応のしようもあったのに。人違いをされている以上、さよに言えるのは「私、ウェンディじゃないから」というただひとつの台詞だけ。彼の熱いことばもくちびるもこころも、どんなに否定してやろうと息巻いても、それは「さよ」に宛てられたものじゃない。

そう言くと、ティンカー・ベルは溜息をついた。

「でもさ、いいんじゃないの？名前なんて呼ばせておけば。ピーターは確かに勘違いしてるみたいよ。だけど、彼がアンタしか見えてないのは、このネバーランドにいるみんなが知ってるわ」

「ティンクも私の立場だったらぜーったい悩むって」

ティンカー・ベルはいい奴だ。時々口が悪いこともあるが、お洒落で頼りになって、こうしてさよの相談に乗ってくれる。気位の高いティンカー・ベルがさよの立場にいたら、怒り狂ってピーターに何がしかの報復でもすることだろう。

ティンクにしてみれば、ピーターほどの美少年に迫られることの何が不幸かと理解できない様子だったが、あいにくと、不幸なことはもつと見える場所にもあった。さよがピーターの嫁であるせいで、さよは人魚には相当に嫌われている。近くに寄ればびしょぬれにさせられるし、そのくせ入り江で水浴びもさせてくれない。彼女らはピーターのうつくしさにすっかり参っていて、彼とおしゃべりしたり、彼の頬にキスするのが何よりも至福の時間なのだ。

しかも、ある日のことだ。弊害はそれだけではないと気づかされることになる。草むらに身を潜め、さよは息を殺した。ああ、どうしてこんなときに限ってピーターはネバーランドにいないのだろう？遠くでざくざくと草を踏みしめる音。男達がなにかことばを交わしている。

「クソッ、どこに行きやがったあの小娘」

「スカイライツ、お前は洞窟に行け。俺は入り江のほうを探す」
足音が遠ざかっていく。気配が消えたところで、たつぷり十秒数えてからさよは身を起こした。身体をかがめながら家路を急ぐ。

ピーターがインディアンや海賊たちと敵対関係にあるのは知っていた。ただ、さよは女だからという理由でいつも家に残されていたし、ピーターたちが平然と人を殺すところなど見たくもなかったから、その実態はよく知らない。とにかくネバーランドとかいうくらいだし、フック船長もいるのかな、という程度だ。

だから、自分が彼らと遭遇することになるなんて、さよは夢にも思っていなかったのだ。さよは森の奥の奥へと走りながら涙を飲んだ。とにかく逃げなければ。迷子たちの家まで戻れば大丈夫。あの家は地下に隠れていて、入り口は簡単には見つからないのだ。

がさがさと草をかきわけて、ようやく目印の木が見えてきた頃だ。ほっとしてさよが駆け出したところで、背後からぐいと引つ張られた。

「キヤーツ！」

「おっと、騒がないでもらおうか、お嬢さん？」

紳士的なバリトンの声音が頭のすぐ上から聞こえる。大きな手で口をふさがれて、騒いでやろうにもこもった声しか出ない。ふわりと上品な香りがする。香水でもつけているらしい。随分背が高いようで、さよの身体が半分抱え上げられていた。これだからこの「小さい」呪いはいやなのだ。さよは大人しく抵抗するのを諦めた。すると、背後の男もさよの口を解放した。とはいえさよの手首がギリギリと掴まれていて、逃げることはできない。

振り返ったさよは目を見張った。どうしてこの世界の人間というのはことごとく美形が揃っているのだろうか。いまだき小説だってもうちょっと平凡なキャラが控えてるモンじゃないの？ 思わずさよを拘束している男をとっくりと眺めてしまった。

これぞ海賊、という出で立ちだ。つばの広い帽子に、丈の長いコート。切れ長の瞳に尖ったあご、いかにも切れ者だ。これまたこんな出会いでもなければときめいてしまいそう。年上好みにはたまらないだろうな、さよは思った。じつと男を凝視していると、彼はシニカルな笑みを浮かべた。ピーターとはまた違う系統の美形だ。

「観察は済んだかな？」

ちよつとハスキーな声も、大人の男然としている。さよは冷静だった。なにせこの男、さよと頭二つ分も身長が違う。こうして余裕の表情で見下ろされるのは嫌いだ。優しげを装った物言いは、明らかにさよを幼い子供だと思っていた。馬鹿にするな、私はもうすぐ原付だって乗りまわせる年齢だ。ここに二輪車なんてないけど。

「私になんの用ですか？」

努めて大人っぽく見えるよう、さよは冷ややかに言ってみせた。

「ピーターをおびき寄せる人質にしようっていうんなら、残念ですがお引取り願いたいんですけど」

お前たちの目論見なんて知っているぞ、というふうにはねつけてやると、男は器用にも片眉を上げて見せた。思ったとおり、目の前の海賊はさよをほんの幼子だと思っていたようだ。さよは苛々した。

「言っておきますけど、私を捕まえたって、なんにも、なーんにも！あなたたちに得なんてないんだから！」

「ほう？」男は面白そうに口端を上げた。「それはどうかな」

「だって私、人違いだもの」

さあこれでどうだ、さよが奥の手を使うと、案の定この男は食いついてきた。しかし手首は掴まれたままだ。これは痕になるかもしれない。さよは顔をしかめた。

「というと？」

「彼の探してる人、ウェンディっていう女の子なんだけど、ピーターっては何を思ったか、間違えてこの私を連れてきちゃったのね。だから今のところ、私はそのウェンディって子の代わりであって、

あの人のホントのお嫁さんじゃないの。さあ、分かったら大人しく船へ帰って、本物のウエンディがネバーランドへ来るまで待ったらいかが？」

あたかも「ピーターは私なんて好きじゃないのよ」という顔を繕った。同時に溜息が漏れる。嘘はついていない。ただ、ピーターの勘違いが未だ解かれておらず、彼がさよのことを「正確にはさよ越しに見ているウエンディを……溺愛していることを言わなかったただけだ。まったく切ない話である。我ながら天晴れな身代わりっぷりだ。考えてみれば、こうして今海賊に捕らわれそうになっているのも、さよではなくウエンディのはずなのに。」

しかし、いつまで待ってみても、男はさよを手放そうとしない。怪訝に思っ て顔を上げると、彼はなにやら思案するように、空いた左手であごを撫ぜていた。

「だがしかし、だ」

結論が出たらしい男が口火を切った。

「たかが身代わりとはいえ、君がああのピーター・パンの家で守られている存在には違いのないわけだ」

「……つまり？」

嫌な予感がした。男の手を振り払おうとすると、彼はさよを逃がすどころか、さよの腰を引つつかんで、あろうことか男の脇に抱えられたのだ！

「わーっ！なにすんの！」

「疑わしきは逃さず、だ。お嬢さん？」

そこは「疑わしきは罰せず」でしょ！さよは心底突っ込んでやりたかったが、ぐらぐらと乱暴に揺れて舌を嚙んでしまいそうだ。恨めしげに男を睨んでやると、彼は痛くも痒くもなさそうに肩をすくめた。その拍子に腹を圧迫された。

「われわれ海賊が、例えばの話だが、当てが外れたとして、君をどう料理すると思う？」

料理。その単語にぞっとした。さよは聞きたくないという意を込めて首を勢いよく左右に振ったが、男はそれを「わからない」という意味だと解釈したらしい。それとも意図的に誤解するフリをしたのか。ともかくも男はにやりと笑って見せた。

「もちろん、殺すだけだ」

囁くような声音だった。さよは背筋がぞわりとあわ立つのを感じた。

ああ、ピーターピーターピーター！もう「さよ」だなんて逐一修正したりしないから、今だけは勘違いしたままで、お願いだから助けにきて！さよは気が遠くなるのを感じながら切に願った。

a c t . 4 さよ救出作戦（前書き）

オブラートにくるんですが残酷表現あり。苦手な方はご注意ください。

act・4 さよ救出作戦

さよがいつまでたつても帰ってこないことに最初に気づいたのは
ティンカー・ベルだった。

「ねエ、アンタたち。さよがどこに行つたか知らない？」

「さよねーちゃん？」

「知らないアイ」

「またピーターのいない隙に散歩じゃねエの」

迷子たちは口々に応えた。ピーターのいない日に、さよがふらりとあたりをうろついているのはいつものことだった。なにせピーターが家にいると、彼は常にさよを傍に置きたがる。おかげでさよはろくに外も出歩けない。たまには息抜きも必要だろうと、迷子たちはさよの散歩を告げ口したりはしなかった。ピーターに知れたらおし間引き確定おきの所業だが。

ティンカー・ベルもちろんそのことは知っている。それに、さよはいつだって、ティンクにだけは行き先を告げて出て行くのだ。さよは空を飛べない（皆、さよに空の飛び方を教えないようピーターによって固く誓わされている。さてはて独占欲の強い男である）から、そう遠くへは行けない。せいぜい人魚の入江が、森のどこか、または妖精の住みかくらいしか彼女の行き場はない。インディアン集落や、けものの狩場、まさか海賊船に迷い込むなんてことはさすがにないだろう。歩いていけば何日もかかる距離だし、ピーターがいつ帰るとも知らぬ状況でそんな遠出をするほど彼女は馬鹿ではない。

今日もそう。さよは入り江で水浴びをしてくると言つて家を出て行つた。あの子も大概懲りない。さしずめ人魚に水浸しにされて、情けない姿でとぼとぼ帰ってくると思つたのだが、日が暮れても彼女の影が見えない。心配になつて入り江を覗いてみたがさよの姿は

なかった。

「さよねーちゃんのヤツ、とうとうピーターに愛想尽かして出てったんじゃない？」

スライトリーが木を彫って笛を作りながらケタケタ笑った。まさかそんなはずはないとティンカー・ベルは一蹴した。

ティンカー・ベルが見るに、さよはかなり堅実な少女だった。見た目はほんの12、3歳くらいにしか見えないのに、その割に大人びた性格。さよは決して無鉄砲に家を飛び出すような子ではない。ネバーランドの出口も知らないし、まして空も飛べやしないのだ。ピーターの勘違いを解くまでは、さよはこの家を出るつもりはないと言っていたし、出られないと思っている。

そもそもティンクの見立てでは、さよは十分ピーターに惹かれてるに違いなかった。ピーターがいるときはなにかと彼の姿を目で追っているし、彼女の苦手な虫を見つけたとき、さよがいの一歩に助けを求める相手はいつだってピーター。そのくせ、あんなにピーターがとろけるような眼差しでさよを見ても、「それは私じゃなくてウエンディに向けたものでしょ？」とさらりと言ってしまうのだ。そうやって呼び名ひとつであれこれ言うこと自体、彼を意識している結果だと、どうしてあの子は気づかないのだろう？ティンカー・ベルには不思議でならなかった。

そのさよが、ピーターに、ましてティンクに何も告げずにこの家を出て行くわけがない。散歩の前に「帰ってきたらカーリーの靴下を繕わなきゃ」と言っていた。ティンカー・ベルは考えれば考えるほど不安になってきた。ピーターはまだ帰らないのか。そう思ったところで、家の入口から弾丸のようにピーターが飛んできた。

ああちょうどよかった！声をかけようとしたティンカー・ベルはすぐさま口をつぐんだ。ピーターは家に降り立つなり、乱れた髪を直しもせずに、鬼気迫る表情であたりを見回すと、ふたこの寝てい

る布団をがばりと引き剥がし、箆笥の扉を破らんばかりに開け、じゆうたんを蹴散らして、部屋を荒らしてまわった。迷子たちは口をあぐり開けて呆然とした。ピーターはひとしきり部屋をめちゃくちゃにしたあとで、血相を変えてまた家を飛び出そうとした。

「ちょ、ちょ、ちょっと！　いったいどうしたっていうの！」

ティンカー・ベルがピーターの襟首をひっつかんで言った。ようやくピーターが止まった。

「ウエンディ」

かすれた声でピーターが言った。

「ウエンディが」

「さよが何！」

「さらわれた」

「ハア！？」

ピーターの手から、はらりと小さな紙切れがすべり落ちた。すかさずそれをティンカー・ベルがキャッチして広げると、我先にと迷子たちが覗き込んできた。メモ用紙のようなそれには、『貴様の大事ななお嬢さんは預かった。返してほしくば海賊船まで来られたし』と、なんともベタな台詞が綴られている。笑えない。

「行かなきゃ」

熱に浮かされたようにピーターがつぶやいて、今度こそ飛び出していった。ティンカー・ベルも慌てて後を追う。

残された迷子の中で、トートルズがぼつりとつぶやいた。

「…さよねーちゃんって、愛されてるなア」

しかし愛だけでは世界は救えない。さよは後ろ手を縛られたままガタガタ震えていた。それを取り囲むように、海賊達が下卑た笑みを浮かべて立っており、皆得物を抜き身のまま弄る手を休めもしない。せめてその剣をしまってくれさえすれば、まだ私の心の平穏が

保てるのに！切っ先が照りつける陽光を受けてぎらつくたび、さよの血の気が引いた。

運の悪いことに、さよを捕らえたのは海賊のリーダーだったらしい。キャプテン・ジェームズと呼ばれているのを聞いた。この世界にフック船長は存在しないのだろうか？相手が誰であれ、命の危機に変わりはあるまいが。

円の中央でおびえるさよに、キャプテン・ジェームズは優雅に歩み寄ると、ピカピカに磨き上げられた長剣の刃の腹で、くいとさよのあごを持ち上げた。冷たい感触にさよはぞっとした。

「さて、お嬢さん？」

キャプテン・ジェームズは絶妙の角度に首を傾けた。

「あの生意気な小僧が、あと何分でここに来るか、賭けないかね？」

そんなもの知るか！さよは内心でわめいたが、口から出たのはヒーヒーという呼吸音だけだった。円のどこから笑い声が上がった。キャプテン・ジェームズもふふと笑う。

「お名前はなんといったかな？」

「さっ、ささ、さよ」

言わなければ殺されるかもしれない。この男の機嫌を損ねれば、彼はまもなくさよの喉笛をブスリとやってしまうだろう。考えただけで鳥肌が立った。

「よろしい、さよ嬢。あと一刻のうちにヤツが来なければ、君は彼に見捨てられたのだと思うことにしよう」

「い、い、一刻！？」

二時間だ。さよは真っ青になった。そもそもピーターがいつ帰ってくるかもわからないのだ。たとえピーターが帰ってきてても、さよを助けてくれる保証なんてどこにもないのに！

「一日！せめて一日待ってもらえないの？」

「往生際が悪いのではないか？ン？」

キャプテン・ジェームズはにべもなく応えた。

「一刻。それまでだ。われわれはそんなに忍耐強い性分ではないの
でね」

周囲が歓声を上げた。さよが怯える様を楽しんでいるのだ。ゲラゲラ、ゲラゲラ。なにがそんなにおもしろいのだろう？さよはぎゅつと目をつぶった。どうせなら眠ってしまいたい。寝ている間に殺して！さよは願った。ああでも、やっぱり痛いのは嫌だから、どうせ願うならピーターに助けを求めたい！

そんな風に考えにふけていたものだから、いつの間にか笑い声が止んでいることにも、さよは気づけなかった。静かな甲板に溶け込むように、聴きなれた声が、冷たくつめたくことばを紡いだところで、ようやくさよははじかれたように顔を上げた。

「一刻も待たなくていいよ、僕はここにいる」

気が抜けて涙が出てしまいそうだった。ピーターはさよに背を向けていた。さよとキャプテン・ジェームズの間に身を滑り込ませて、キャプテン・ジェームズの剣の刃を踏みつけている。その脇から弾丸のような速さで金色のなにかが飛んできた。ティンカー・ベルだ！

「ティンク！」

「さよ！」

ティンカー・ベルはさよの鼻先にべたりと抱きついていて、彼女の涙がさよの眉間を濡らした。

「もうっもうっ！いつまでも帰ってこないから、心配したじゃない！」

「ていつ、ティンクう……」

もう二度と会えないかと思った、ああだけどまさかここでピーターやティンクもろとも殺されてしまうのではないか。さよはぞわりとした。すると、さよを庇うように立つピーターが、腰に差したダガーをぐつと引き抜いた。それからくるりと振り返る。

こちらを見たピーターの表情に、さよは思わず息を呑んだ。彼の

甘い甘い顔立ちは、蠟人形みたいに冷え固まっでいて、それでも綺麗すぎるその瞳は、冬空かと見まがうほどキンと張り詰めていた。本当に彼はピーター？目を見開いた拍子に涙がひとつぶぼろりと落っこちたのを、ピーターの指先が掬い取った。

「泣いてる」

ひどく単調な声音だった。

「誰に泣かされたの？僕のかわいいウエンディ」

さよはあんまり驚いたものだから、すぐには答えられなかった。間抜けにもぽかんとピーターを見上げていると、何を思ったかピーターはゆるりと身を起こして、自分よりもずっと長身のキャプテン・ジェームズに視線を上げた。キャプテン・ジェームズは大の大人のくせに、こんな小柄な少年にたじろいだ。それだけピーターの纏う空気は異質だった。

「おまえ？」

ピーターが冷ややかに問うた。その瞬間、ピーターこそがこのネバールランドの覇者なのだとさよは理解した。王のように悠然と立っているピーターに抗う者が、いったいどこにいるのだろう。こうして背に庇われているさよでさえ、足が竦んでしまっているというのに？「おまえがウエンディを泣かせたの？」

「……」

「答えろよ」

キャプテン・ジェームズは後ずさった。そして他の海賊たちも。こんな子供ひとりに。彼等の顔にはそんな憎々しげな色が宿っていた。ただ何も言わない。ピリピリと張り詰めた暴発寸前の少年に、大人たちは怯えていたから。

ピーターは沈黙を肯定と取ったようだった。くすりと何事か笑い声を漏らすと、男女問わず魅了する、甘やかで危うい声音で彼は言った。

「ふっん、そう」

一歩前に出た。ティンカー・ベルがさよの頬に張り付いて震えた。

「その剣？その剣でウエンディを怖がらせたの？」

ピーターがゆったりと首をかしげた。キャプテン・ジエームズの視線が剣にふらついた直後、さよは思わず目をつぶった。

何が起こったのかはすんでのとこで見なかった。ただ、つんざくようなキャプテン・ジエームズの悲鳴と、海賊たちがピーターを恐れつつうろたえる声、それからティンカー・ベルが耳元で「ヒツ」と小さく声を上げたことは確かに分かった。閉じたまぶたを開かないようにぎゅっと力を込めた。なんだかきもちわるいにおいがした。すると、ピーターが突然ケタケタ笑った。

「キャプテン・ジエームズ！これでおまえはもう剣も持てやしないね？ウエンディを泣かせたんだ。ホントは殺してやりたいけど、ウエンディが怯えるからこれだけで十分だよね」

さよは暗いくらい底なし沼の中に落ちたかのような心地がした。ピーターがなにをしたのか、なんとなく予想がついたのだ。

「ほーら、ごらんよ、キャプテン！」

ピーターの声が遠くなった。対するキャプテン・ジエームズは痛みのためかのたうちまわっているらしい。バンバンと床かなにかを叩く音がした。

「そこにいるワニさんにごちそうだよ。それっ」

ああ、いっそ気を失えたらいいのに。さよは再び涙が出てきた。ピーターの楽しそうな声は続いている。

「ねえキャプテン、あいつ、ずいぶんおいしそうにお前の右手を食ってるよ！アハハ！いっそ残りの身体も食われちゃいなよ！」

「キツキツ、キサマー！」

「さあ、ウエンディ。帰ろう？」

頬をピーターらしき手にくるまれて、さよはようやく目を開けた。びっしょりと赤い液体で濡れたピーターに、さよは悲鳴も凍りついた。彼はいつものうっとりとした笑みを浮かべて、ねっとりさよ

の唇を舌でなぞると、そのままいつぞやかのように軽々とさよの身体を抱き上げた。

「駄目じゃないかウエンディ、家から出ちゃ。奥さんはだんなさんの帰りを待ってなきゃいけないんだよ」

さよは絶句していた。愛しげに向けられた視線から目が離せなかった。ぎゅうとさよを抱え込んで、ピーターはにつこり笑った。

「僕のウエンディ。次に勝手に出て行っちゃったら、お仕置きだからね」

「お、お、おしおき？」

「うん。…両脚とも使えないようにしちゃえば、ウエンディはどこにもいかないでしょ？」

やはりこの少年は異常だ。さよは気の遠くなる衝動そのままに意識を失った。

a c t ・ 4 さよ救出作戦（後書き）

ちなみにかのフック船長のフルネームはジェームズ・フック。フックが本名なのかあだ名なのかは不明。

act・5 もつれる勘違い

さよが海賊船にさらわれて以来、ピーターはますますさよにべつたりだった。

さよとしてもあんな目に遭うのはもうこりごりだったし、ピーターの脅しも効いていたので、彼に黙って森に出るようなこともなかった。できればあの恐ろしいピーターの姿は二度と見たくない。さよがおとなしくしていれば、彼はいつものべたべたに甘いお砂糖菓子みたいな少年だった。

そして、もうひとつ変わったことがある。さよが「私、ウェンディじゃないから」と逐一入っていた修正が、ぱったりと途切れたのだ。

「どんな心境の変化？」

お調子者のカーリーがニヤニヤしながら聞いてきた。さよは半眼で彼を見た。

「べつに」

「べつにつてこたアねえだろ？なに、とうとうさよねーちゃんもピーターに落ちちゃった？」

「私としては、アンタが靴下に穴ばかり落としてくれなきゃ言うことはないんだけどね」

「無理矢理話をそらすなよオ」

さよはカーリーの言葉をまるごと無視して、彼の靴下の修繕にとりかかった。胸の奥がざわめいていて、口を開けば怒鳴ってしまいそうだ。

べつに。そんな可愛らしい気持ちじゃないのだ。むしろさよは打算にまみれている。今までは口癖のように、自分の名前を主張してきたさよだったけれど、気づいたのだ。今ここで、彼に自分の正体

がばれてはいけない。

ピーターが望んでいるのは、あくまで「ウェンディ」なのだ。「さよ」じゃない。じゃあ、もしさよがウェンディじゃないと知ったとき、ピーターはどうするのだろうか？ 考えただけで恐ろしい。きつと、きつとピーターは、さよのことなど歯牙にもかけなくなるに違いない。勘違いを正して、さよを家に帰してくれるなら、それでもいいのだ。あつさり捨てられてしまうのはさよとしてもむなしいものがあるが、彼がさよ自身を見ていないことくらいは最初からわかっていて。怖いのは、彼が、さよを家に送り返す気すら失せてしまったかどうか、ということだ。

さよは空の飛び方も知らないし、自力で帰ることも、ましてこのネバーランドの地理すらわからない。事情をしるティンカー・ベルや迷子たちは助けてくれるかもしれないが、ピーターの命令がすべてである彼らにとって、ピーターに見捨てられたさよの存在がどんなに価値のないものとなるか、さよは想像しただけで震え上がった。つまり、ここはそういう島なのだ。ピーターに見捨てられたら、全てが終わってしまう。

そうならないためにも、さよはピーターに従順でいる必要があったのだ。さよはピーターに口答えもしなくなつたし、彼の甘い台詞にもいちいち動じなくなつた。これでいいはずだ。どうせピーターがほしいのは「ウェンディ」なのだから。さよの心なんて、彼にはいらぬのだ。

それでも…

それでも、たまに彼の口説き文句が「さよ」にあてられたものならいいのにと、そう思ってしまうのは。少なからず、さよがピーターに惹かれているという証拠なのだろうか。さよはうんざりして目を伏せた。

ピーターは心底苛立っていた。そばで見ているティンカー・ベルには手に取るように分かる。彼はいらいらしているとき、表情が貼り付けたような笑顔になって、口調がやや早口に変わり、なにかにつけて迷子たちに八つ当たりをするのだ。ピーターはここ最近めつきり外出も取りやめて、ひとりの女の子ばかり目で追っている。

小芝さよと名乗る女の子を、何故だかピーターが「ウエンディ」という運命のひとと勘違いしているのは、いまやネバーランドの常識だった。ティンカー・ベルは、よそのの女がピーターの嫁としてこの世界にのさばることをよしとしていなかったし、そのウエンディとやらがやってきたらどういたぶってやろうかと息巻いていたので、まさに拍子抜けだった。ピーターの勘違いもそうだが、何よりさよ自身が、ティンクの想像していたどんな女とも違っていたからだ。

ピーターはあの容姿だから、きっとここに来る女はそれに魅了され、いい気になって、浮き足立っている調子にのった輩だろうとティンカー・ベルは考えていた。事実、ここにいる妖精や人魚たちはこぞってピーターにお熱だし、ティンカー・ベルからしてみれば、ピーターに惚れない女は皆無だと思っていたのだ。

それがどうだ。さよはピーターに言い寄られても舞い上がりもしない。ばかりか、ピーターの想い人は自分じゃないのだと主張する始末。ピーターは激しく鈍感なので、単純にさよが恥ずかしがっているだけだとそれこそ勘違いはなはだしいことを考えているようだが、ティンカー・ベルにとってさよのそうした卑屈な態度は好印象だった。

しかし、先日さよが海賊船から無事帰還を果たしてから、彼女の態度が急変した。ピーターに甘い声で囁かれても無反応、ピーターにべたべたとまとわりつかれても無抵抗。今までの狼狽っぷりなど

嘘のようだ。さすがのピーターもこれはおかしいと気づいたらしい。どうにかしてさよの気を引こうと躍起になっている。

「怯えてるんじゃないの」

ティンカー・ベルは冷静に言った。ピーターはぴりぴりしながら返した。

「どうして」

「どうしてって、そりゃ、あたしだって怖かったもの。目の前で大の男の手首かつさばくシーンなんて見せられて」

「だってあいつ、ウエンディを泣かせたんだ」

「ウエンディ」。その単語にティンカー・ベルはあきれ返った。その呼び名がさよの態度に余計に拍車をかけているのではなかるうか。ティンカー・ベルからしてみれば、どうして呼び名ひとつにいちいちこだわるのか分からないほど、ピーターにはさよしか見えていない。彼女の染めたやわらかい髪とか、黒い目に、ピーターより少し小柄な体躯、戸惑うとあちこちきよるきよる癖、とにかく彼女の端から端までかわいいと連呼するピーターの何が不満なのか。勘違いはどうであれ、少なくとも今、ピーターは明らかにさよが好きなのに。

ティンカー・ベルはもうすこし焚きつけてやろうかと、底意地の悪い気持ちで口を開いた。なんにせよ、ティンクが気に入ったあの少女を悶々と悩ませているのは、目の前のどうしようもない男なのだ。

「それか、ピーターに愛想が尽きたのかもね」

「え？」ピーターの目が剣呑に光った。「どういうこと？」

「突然わけもわからずネバーランドに連れてこられて、ピーターには半分あの人に閉じ込められるし、なんとか外に出られたと思ったら海賊船にさらわれて。ま、普通に考えて、アンタはさしずめ疫病神ってとこね」

ピーターの顔色がさっと変わった。ティンカー・ベルを悪党かなに

かのようににらみつける彼に、妖精は動じた様子もなく鼻で笑った。
「そのうち出て行っちゃうんじゃない？あの子」

「出て行かない」

いらいらしたまま、ピーターははつきりと言った。ティンカー・ベルの眉が寄った。

「ウエンディは出て行かない。だって、ウエンディのこころは僕のものだもん」

ハア？ティンカー・ベルが素っ頓狂な声をあげる傍ら、ピーターはずんずんと迷子の家に向けて歩いていく。置いてけぼりを食らったティンカー・ベルは、嫌な予感にむずむずした。

「ちよつと、それどういう意味？待ちなさいよオ！」

ピーターは帰ってくるなり、繕いものをしていたさよにべったり張り付いていた。ここ最近ではよく見られる光景だ。さよも迷子たちも別段驚くこともなかった。しかし、あんまりにもきつく抱きしめてくるものだから、手元が狂って自分の指を針で刺してしまったさよはとうとう音を上げた。

「ちよつとピーター、抱きつくのはいいいけど、もつと力を緩めてよ」

ピーターは何も言わなかった。切なげな瞳でさよを見ている。さよが眉をひそめていると、不意に彼はさよの手首をひつつかんで、血の玉の浮いた指をぱくりと口に含んだ。ぎゃあと悲鳴を上げそうになるのを寸でのところどころでこらえて、さよは動揺を隠した。

「な、なに？」

「……」

ピーターは不機嫌だった。さよは不安になってきた。なにか、彼の機嫌を損ねるようなことをしたのだろうか。

彼は変わらずさよをぎゅうぎゅう締め上げて、その首筋に顔をうずめた。

「…ウエンディは、ずっと僕と一緒にだよ」

「え？」

「一緒だよ。一緒だって言っ、ウエンディ」

さよは口をつぐんだ。なんと答えればいいのかわからなかった。さよは家に帰りたいが、それを正直に言うのははばかられた。結局、さよはおどけた調子で笑った。

「な、なあに？ピーター。いきなり？」

「……」

「あ、あの、でも、いくら私が一緒にいたいって言っても、ピーターのほうは私のことなんてすぐに飽きちゃうかもしれないし」

「……」

「ピーターだって、私とずっと一緒なんて嫌じゃないの？ねえ、ちよつと、ピーター、」

そんな恨めしそうな顔しないでよ。そう続けようとしたさよの言葉は飲み込むしかなかった。突然ピーターに横抱きに抱き上げられて思わずさよはカーリーの靴下を取り落とした。「ピ、ピーター？」

さよは目を白黒させた。

「そんなこと、考えてたの」

「そんなことって」

「いいよ。ウエンディは僕がいなっきゃ駄目なんだって証明してあげる」

さよの背がぞわりと波打った。どういうこと？問う前に、さよはピーターに抱えられたまま空中に躍り出ていた。

「ひっ……」

思わずピーターの首にしがみつくと、彼はさよの耳元でくすくす笑った。あんまり冷たい声だったものだから、さよはぎょつとした。ピーターの空色の瞳が怪しく光っていた。

「ウエンディ、怖い？」

恍惚とピーターが尋ねてきた。

「僕達ふたりつきりだよ。こんなに高いところまでは迷子たちも来られない。ウエンディも、ここからじゃひとりでは帰れないよね」
「なにを……」

ピーターは突然さよの身体を下ろした。ぐらりと揺れて、さよは思わずピーターにしがみつこうとするが、すげなく肩を押し返される。高い高い樹の枝の上だった。人が乗るにはやや心もとない太さで、あおる風にさよの血の気が引いた。さよは引きつった声を上げた。

「や！な、なに？」

「ウエンディはもっと思い知ればいいんだ」

ピーターはさよの唇にかすめるようなキスを送りながら言った。

「君は僕から離れられないってこと」

なんだっていうんだ。ガクガク震えながら樹にしがみついたさよは抗議しようとした。しかし、さよのそんな思いもむなしく、ピーターはひらりとさよから距離をとる。どうやら彼は、さよをここに置き去りにするらしい、さよは瞬時に悟った。目頭が熱くなって、さよは情けない声でわめいた。

「おろして！」

「駄目。まだおろしてあげない」

ピーターは冷たく言い放った。くすくすと、楽しいんだか、そうではないのだから、よくわからないほどの暗い笑い方をして、彼はなおもさよから遠ざかっていった。腕を伸ばせばかろうじて服の端にとどく距離だが、あんまり恐ろしくて、樹から手を放すことなどできやなかった。

「一晩も経てば身にしみてわかるでしょ、ねえウエンディ。君は僕のものだ」

言うなりピーターは、さよの制止も聞かずに飛び去ってしまった。さよは呆然とした。風の音がやけに耳について、さよはようやく我に返って、ぎよろぎよろとせわしなく目を動かした。探し人の姿はもうどこにもない。

「ピーター？」さよは弱弱しく呼びかけた。「ピ、ピーター？」

こんな小さな声じゃ、いなくなってしまったピーターを呼び戻すにはぜんぜん足りないだろうと分かっていたが、どんなにのどを開こうと思っても、さよは突然息のしかたを忘れてしまったかのように、薄い呼吸であえぐしかなかった。当然ながら返事はない。それを理解した瞬間さよは堰を切ったように泣き出した。枝がミシリと音を立てるたびにひきつった悲鳴を上げた。

ひとしきり泣き喚くと、今度はピーターへの怒りがふつふつと湧き上がってきた。あの破天荒な少年は一体なにを考えているのだろう？ 大体、さよは「ピーターが飽きてしまうかもしれない」と言ったのに、どうしてか彼は「さよがピーターから離れられない」と言っていた。論理の破綻だ！ さよがどんなにピーターに依存したところで、ピーターに飽きられてしまったらさよなどあつさりと捨ててしまうのだろう。ましてさよは「ウェンディ」ではないのだ。

「なによ！ ピーターの馬鹿！」

このネバーランドで王者面をしたって、さよは彼の思い通りになどなあってやらない。やるもんか。先ほどまでの殊勝な態度などどこへやら、さよは思った。迷子たちは、ピーターのことを英雄のようにあがめているようだが、どうせ彼なんて人のことを考えやしないし、人が自分についてくることを当たり前だと思ってる。ただの鼻持ちならない子供だ。そうだ、彼さえいなければさよはこんな目に遭わずに済んだのだ。子供達の面倒を見なければならぬし、海賊船にはさらわれる、人魚達には嫌われて。ろくなことじゃない。さしず

め、ピーターはさよの疫病神みたいなものではないか。

もう彼氏は小柄なひとがいいなんて言わないぞ、そこまで考えてさよはまた涙ぐんだ。そんなことを言っただって、今頼れるのはピーターただひとりなのだ。

「ピーター」

泣きながらピーターを呼んだが、彼は現れない。ぐずぐずと泣いていれば彼は来てくれるだろうか。さよはごしごしと目をぬぐった。それがいけなかった。

ばき、と不吉な音がするやいなや、視界がぐるりと回った。あ、と思う間もなく、尻の下堅い枝の感触が消えていた。落ちたのだと気づいたのは一拍遅れてからだった。

悲鳴を上げる間もなかった。ひゅつとかすれた声にならない声が漏れて、さよは真つ逆さまに地面へと落ちていった。ああ、私死ぬのかな。何の感慨もなく、ただふとピーターの顔が脳裏をかすめたところで、がくりと衝撃があつた。さよはぎゅつと目を閉じた。

あたたかい体温にぎゅうと抱え込まれて、さよは思わずその服にしがみついた。もう一瞬だって彼から手を離したら、たちまち自分は死んでしまうのではないかとさよは思った。くすくす、頭上で平坦な笑い声が響く。

「ね？」いたずらが成功した少年のようにピーターは言った。

「だから言っただでしょ？ ウエンディは僕と一緒にいないと駄目なんだって」

「うっ、ピーターの、ばか！」

しゃくりあげながら、さよはますますピーターに貼り付いた。この恐ろしい少年が、いつさよを放り出してしまうかわからないから。

「うわあああん！」

さよは赤ん坊のように泣き喚くと、ピーターの首に腕を巻きつけた。本気で怖かったのだ。死ぬかと思ったのだ。こんなことをあっさり

とやってしまう。ピーターが怖くて怖くて、見捨てられてしまいたく
なかった。

やがて泣きつかれて眠り込んでしまったさよをピーターは見下ろ
した。親指で目尻に残った涙をぬぐってやりながら、ピーターはそ
っと声をかけた。

「ウエンディ？寝ちゃったの？」

さよは静かに寝息を立てていた。「ウエンディ？」ピーターはもう
一度呼びかけた。さよがすっかり眠ってしまったことを確かめると、
ピーターはさよを横抱きにしたままきつく抱きしめた。

「…さよ」

誰にも聴こえないように、少年はささやいた。彼の大切なたからも
のかかえて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4295r/>

はた迷惑ネバーランド

2011年10月8日22時26分発行